農業土木を支えてきた人々

津田永忠と新田の開墾

政田　孝*

I. はじめに

岡山藩士“津田永忠”の名は，当時元禄のころ，江戸幕府はいうに及ばず各藩にも知られ，大阪の金融商人も永忠の名であれば，安心して大金を貸出したというほど，信用と実力を備えた経世家でもあった。

天下の三名君のひとりといわれる池田光政と，その後継ぎ綱政二代の主君に仕え，郡代として藩政の実権をもち番頭という藩士としての最高位まで出世したが，その数々の業績に驕ることもなく，それらを記した資料も家中の奥に秘めて門外不出とし，子孫もその教えを守ったために，熊沢蕃山に比して，後の世に広く知られる機会もないままであった。

ところが，明治時代になり，農業の振興に積極的な取組みを行った明治政府が，農政家としての津田永忠のすぐれた業績を見直し，その功績が高く評価される結果となった。そして明治43年に従四位が追贈されたのである。

そうしたことが契機となり，大正5年には旧岡山藩士木畑道夫氏が「津田永忠君年譜」を出版，大正9年には山中貞芳氏が「津田永忠翁之誌」をまとめるなど，津田永忠顕彰の気運が次第に高まったといういきさつがある。

その後も引続き“永忠の人と業績”については，著名な人たちの手で研究され，その内容も余すところなく発表されてきたことでもあり，ことさら私などが言及するのは，おこがましいといわれそうである。

ただ，私の住む岡山県の東部和気町には，永忠公の永眠された墓地があり，永忠のはじめて手がけた土木事業である藩主池田家和意谷墓所や，わが国最初の庶民の学校として，人材育成のためにその造営と存続に生涯心血を注いだ閑谷学校（国特別史跡）など，永忠にかかわる史跡や伝承が，周辺に多く残されている。

また，町の中を流れる吉井川には，永忠の築いたと伝えられている田原井堰（県史跡）が，いまも520mの雄大な姿を大川に横たえて豊かな潅漑用水を湛え，500haの美田をうるおしており，現在これの学術調査をすすめている関係上，永忠の事績に関与することが多い。そうした中で，私の学び得たことがらを紙数の許される限り，紹介させていただくことにする。

II. 津田ぶしんのこと

さきほども少しふれたが，永忠の記録文書は門外不出のまま戦災で焼失した。したがって，永忠の業績にかかわる記録は，池田家に残された文書によるものが多い。

藩主池田光政・綱政をたすけて，政治・経済・文教に尽した偉業は，数えあげても十指に余りある。したがって，永忠の年譜やそれらの業績すべてにふれる訳にはいかないので，ここでは土木事業に関する主だったものを列記してみると，

1. 寛文7年（1667）28才池田家和意谷墓所造営
2. 〃　11年（1671）32〃友延新田に井田地割施工
3. 延宝7年（1679）40〃倉田新田開墾　329町歩余
   〃　〃　〃倉安川開削
4. 天和2年（1682）43〃福浦新田開墾　22町歩余
5. 貞享元年（1684）45〃幸島新田開墾　561町歩余
6. 〃　3～4（1686～1687）百間川工事完成
7. 〃　4～元禄13年（1687～1700）48〃後楽園造営
8. 〃　5年（1688）49〃高浜新田開墾　15町歩余
9. 元禄5年（1692）53〃沖新田開墾　1,918町歩余
10. 元禄年間　田原井堰改築
    和気用水開削
    田原用水延長開削
11. 元禄8年（1695）56〃牛窓港一文字波止築造
12. 〃　13年（1700）61〃大多府港築造
13. 〃　16～17（1703～1704）沖新田大水尾に唐樋設置

およそ300年を経た今日も，それらのすべてが営々と

* 岡山県田原井堰調査委員会事務局（まさだ　たかし）

生き続けていることを見ても，その業績の偉大さが推しはかれると思う。

だが津田永忠がいかに超人的な能力の持主であったとしても，すべてを一人でなし得るわけでなく，土木事業では近藤七助・田坂与七郎など，永忠の両腕ともいうべき腹心の部下が活躍している。

しかも各地の伝承には，すべてに共通したパターンがあり，難工事に永忠が弱っているとき「道通りが」「百姓たちが」「乞食坊主が」話しているのを，物蔭に身をひそめて耳を傾け「よいことを教えてくれた」と手を合わせ，話のとおりにすると工事が成功したというすじ書きである。

地元の長老や経験者，職人などの意見も大いに尊重したのであろう。そうした人柄が人々から慕われ信頼される結果となり，多くの人材に恵まれることにより，超人的な事業の数々を成し得たのであろう。

地形や水の流れ・汐の流れ・資材など，地域の特異性をうまく生かして，自然の理に叶った構造物には無理がなく堅牢である。見た目には粗々しいが，目に見えないところに緻密な施工がなされているために，何百年を経ても狂いが生じない。これを地元では“津田ぶしん”“永忠ぶしん”という。そして「永忠のつくった○○」とか「永忠の○○」といって，その出来栄えを「永忠」ならあたりまえといわんばかりの口ぶりで，誇らしげに話をする。永忠の土木技術に対する絶対的な信頼と敬意をこめて，親から子にそして孫へと受継がれ伝えられてきたのである。

III. 後楽園と閑谷学校

県外各地から岡山を訪れる人たちの多くが，観光名所として岡山市内の後楽園に足を運んでいる。

水戸の偕楽園，金沢の兼六園に並んで天下の三名園といわれているのが，この岡山の後楽園である。

話が少し横道にそれるようだが，藩主池田光政が鳥取から備前岡山へ転封されて以来，藩体制の確立と民政の安定・人材の育成に力を入れ，趣味道楽には殊の外きびしかったのに比して，後継者の綱政は元禄文化が華やぐ時代の風潮に乗って貴族趣好が高く，父光政が亡くなるのを待ちかまえていたように，永忠に命じて後楽園の造営に当らせた。

貞享4年（1687），永忠は造園工事に着工，数度に分けて工事をすすめ，元禄13年（1700）に完成した。設計者が誰なのか，その確かな記録が残されていないようだが，藩学校で小笠原流の師匠をつとめた「長瀬門誰」という人が，後楽園着工の前年に京都から綱政に招かれており，彼がこの園の設計者だという説もあるらしい。

「石をたたみ　奇樹をうへ　水をせき入れ　山水田野の気色を　居ながら見給ふ様に移し成」された（池田家履歴略記上巻532頁）という大庭園に，材料が豊富に求められる川芝を用いて広々と敷きつめるという，当時としては奇抜というか画期的な造園設計であり，その独創性と剛胆さ，そして無駄の無さは永忠の他の工事にも共通して見られる“津田ぶしん”そのものであり，まして園内を流れる後楽園用水は，旭川の上流で取入れた祇園用水から，石組みのサイホンを用いて導いており，そうした着想と技術は，永忠でなければ不可能なことであったろう。

国の特別史跡“閑谷学校”も，永忠の苦心の建造物だが，ここに国宝に指定されている講堂がある。

先代光政は永忠に命じて藩学校を設立し，国中に手習所を置いて庶民の教育にも力を注いだが，綱政の代になると，手習所が次々と廃止され，閑谷学校の存続も危ぶまれるようになってきたために，光政の志を受継いでなんとしてもこれを維持しなければならないという，永忠の苦衷があった。とくに廃止の理由とされる財政問題に対処するために，学校を地主に仕立て，和意谷墓所経営と同様にして藩財政から独立させた。

永忠がその次に手を打ったのは，学校の施設を万全のものにすることであった。学校が老朽化したり焼失すれば，二度と再建することはできないと考えたからである。元禄11年，永忠は講堂の大改築から着手した。

その様子について，柴田一氏（現兵庫教育大助教授）は「津田永忠——その人と業績」に，次のように述べている。

> 桁行7間，梁間6間，単層の入母屋造りで錣葺き。一見すると，大屋根の上にいまひとつの屋根が覆いかぶさった感じの構造である。建坪92坪の講堂の内部は，床張りの大広間になっていて，10本の欅の太い円柱が天井を貫いて大屋根をがっちり支えている。講堂の周囲の壁には花頭窓がはめこまれ，東西南北にそれぞれ入口が設けられ，その外側には吹きさらしの廻縁がめぐらされている。
>
> 和風に唐様の手法をとり入れた講堂の内部は，すべて漆塗りで美しく丈夫に仕上げられた。この講堂が完成したのは，元禄14年（1701）であるが，拭き込まれた円柱・床板はいまなお昔ながらの光沢を放っている。
>
> しかし，永忠の苦心の跡を留めてわれわれを驚嘆させるのは，改築のとき以外には目につかない屋根の木組みの緻密さである。

昭和35年の講堂の屋根葺替工事を担当した湧田寿徳氏の研究によれば（岡山県教育委員会「閑谷黌講堂外四棟保存修理工事報告書」），屋根瓦を葺く場合，野地板のうえに直ちに土居葺をほどこし，そのうえに土留桟を打ちつけ瓦を並べるというのが，普通の屋根の葺き方である。ところが講堂の屋根の手法は，檜の野地板を入合（いりあい）に張り，そのうえに土居葺きを施しているが，その土居葺きの手法が変っている。葺足を短くし厚い葺板を二枚重ねに葺いている。屋根の下地にこれほど堅牢な工事を施したものは他に例がないといわれる。

この土居葺きのうえに，さらに厚さ1寸1分の檜の厚板を流れに張り，その詰め板の合わせ目には，幅3寸3分，厚さ1寸5分の目板を打ち付け，流し板の合わせ目から雨が下にまわらぬよう，漆（うるし）をしっかり喰い込ませている。これだけでも200年の風雪に耐える頑丈さをもつといわれる。

その流し板のうえに備前焼の瓦を葺いたが，これがまた独特の手法である。流し板のうえに泥土をおき，その泥土のうえに瓦を並べるのが普通であるが，永忠は檜材で瓦1枚1枚を支える瓦棒を栫（こしら）え，それに丸瓦をはめこむという，まことに手の混んだ方法を採った。雨水が泥土に浸透し，乾燥に手間どり，屋根の木組みを腐らせることを配慮したのである。

さらに屋根瓦が破損して，万一雨漏りのあった場合のことまで考え，流し板に入った水が内部に浸透せず，そのまま外に流れ出るように，流し板の先端に排水用の陶管までしつらえたのである。——

引用が少し長く詳細に過ぎたかもしれないが，永忠の本領が存分に発揮されている様子が，柴田一氏の文章からおわかりいただけたと思う。そこには，人智を超えて一種の執念すら感じるほどである。

建物の床を高くし，周囲に排水溝を設けて湿気を防ぎ，「避火山（ひよけやま）」と石塀を設けて火災に備えている。しかもなお政治的な圧力に安心できなかった永忠は，校内に光政公の遺品を埋葬した塚を築き，金銅で鋳造した孔子像を聖堂に安置して権威をもたせ，学校廃止の圧力に対処しようとした。だが永忠の案じた如く，永忠が亡くなると学校廃止の命が下された。そのとき，永忠の友人でもあり時の学校奉行でもあった市浦清七郎が，一命を堵して綱政に懇願した結果，その存続が許されたのである。清七郎の功もさることながら，永忠のこれほどまでの周到な配慮がなされていなかったら，やはり今日の閑谷学校は存在しなかったであろう。

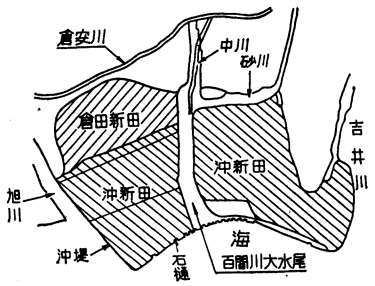

図-1　備前国上道郡沖新田図

IV.　新田の開墾

江戸時代における岡山藩の新田開墾は，全国的にも有名だといわれる。300年の間におよそ8,000町歩の新田を開発し，後にオランダの技師を招いて行った児島湾の藤田開墾7,000町歩を加えると，15,000町歩，これを石高に換算すると30万石で，備前の旧石高に匹敵する規模である。その中でわずか13年ほどの間に，永忠は約4,000町歩の干拓新田を開墾した。

戦乱に明け暮れた戦国時代が終り，世が平和になるにつれて人口が急増しはじめたことと，江戸幕府の鎖国制度で各藩自給自足の経済は，深刻な耕地不足をもたらし，幕府も新田の開墾を奨励し，全国的に新田の開発がすすめられた時代でもあった。

池田光政が鳥取から備前に封じられたのが寛永9年（1632）だが，寛永15年には「国中新田に可相成地在之ハ　見立可申出候事」（光政日記・寛永15年12月）と，新田開発可能な土地を申出るよう郡奉行へ命じている。

だが慶安3年から明暦3年（1650～1657）に番頭として光政を補佐した熊沢蕃山は，「下に新田を発し水をかけんとする故に多くの古地損ずる也（なり），新田多（おおき）は国の為よからず，おこらぬにはしかじ」（大学或問）と新田開発には消極的であったことがうかがえる。

しかし光政はその後も新田開発を奨励し，新田の保護政策をとったが，津田永忠が藩の事業として手がけるまでは，すべて民営（土豪・町人等）による小規模のもので，寛永14年から延宝元年（1637～1673）の36年間に，約750町歩が開かれたに過ぎない。光政以前の前池田（池田忠雄公）時代にも，かなり積極的な取組みがなされているが，それでも約530町歩である。

さきほども述べたが，これに比して津田永忠の13年間に4,000町歩という実績は，いかに偉業であったかを物語っている。しかも新田の用水路開削により，古地を損ずるどころか，いままで荒地や畑地であったところを水田として開墾されたものも随分とあるが，それらはこの

4,000町歩には含まれていない。

延宝7年（1679）に取組んだ倉田新田は約330町歩，2月10日に諸役が任命され新田鍬初めが行われた。そして8月には堰堤の締切りに成功し，新田の潅漑用水として，吉井川沿いの吉井村から旭川沿いの平井村まで9,008間（約16.4 km），幅2間の倉安川開削も，同時に完成させている。

次いで貞享元年（1684）4月，幸島新田の開発に取組み，6月24日に汐留に成功，9月に完成している。

築いた堤防長3,400間（約6.2 km），これにより，561町余の新田が開墾されたが，これらをみても永忠の工事の迅速さには，目を見張るものがある。

さらに貞享2年（1685）に沖新田開発の伺いを出したが，翌年になって沖新田をしばらく見合わすように命じられ，貞享4年（1687）から後楽園の造営にあたらせられた。そして元禄4年（1691）後楽園の第2期工事を終えたその年の9月に，沖新田の開発にとりかかるよう命ぜられ，元禄5年（1692）正月11日鍬初め，6月23日には汐留に成功，7月19日には外部堤を完成させている。

池田家履歴略記によると，工事は全長6,518間（約12 km）の堰堤を，1番から9番までの丁場に分けてそれぞれに2～6名の役を配し，さらにこれを1～3番，4～6番，7～9番に三分して築立奉行をおき，その上に総奉行を，そして永忠は出張総督として全責任をもち医師その他の役を配して工事をすすめた。

延人夫が	1,038,867人。
土	104,330坪（6尺3寸6面坪）
石材	22,748坪（堤下根石捨石投込石）
石垣裏詰粘土	9,073坪5合8勺
芝	618坪5合
松丸太	68,050本（目通89寸～2尺回り）
松葉	190,700把（3尺縄）
竹その他	20,965束

工事に要した費用は米が15,418石7斗2升，銀札が245貫438匁，米を銀札に換算して合計すると，964貫817匁6分5厘（米3俵にて44匁5分9厘）という莫大な額であった。永忠はこの費用を調達するために，岩田喜兵衛を上方へ送り，大阪の鴻池と京都の両替屋善五郎から銀500貫を，永忠の名儀で借用している。（奉公書）

永忠の普請事業はそのほとんどが，社倉米* からの融資でまかなわれているようだが，後楽園の造営費用が重なった後でもあり，沖新田開墾の巨額な費用は，社倉米だけではまかなえなかったからであろう。

それにしても，この沖新田の計画は，延宝7年に行った倉田新田開墾のときすでに，その沖合も開墾する構想が永忠の頭の中にあり，その技術的な解明を模索していたと思われる。したがって，倉安川は倉田新田用水のみならず，沖新田用水としても利用する計画であった。だがこの倉安川は，既存の用水路や小川を活用しながら新堀でつないでいく方法をとっているため，古田の水利権も入組んでいる。したがって吉井川の吉井水門からの取水量では不足の場合を考え，はるか上流の和気町にある田原井堰を嵩上げし，田原用水路も延長して，砂川と倉安川の支流への補給水になるよう，その末端をつなぐという大規模な構想で，沖新田開墾の前後にこの田原井堰と田原用水工事も行っている。常人ではとても考え及ばないようなことを，さりげなくやってのけたとでもいうのか，田原井堰・田原用水工事に関する記録は残されていない。ただ，津田永忠や近藤七助，郡医者第11代万代常閑の奉公書，地元古文書にわずかにふれてあるだけで，工事の内容については，地元に残る伝承とその構造物が語りかけてくれるだけである。

地図を見ながら話せば，ひと目でわかることでも，文章の説明だけでは甚だわかりにくい。どうせ地名を書いてもわからないんだからと，話が大雑把になる。しかし，江戸時代に備前地域の農業土木を大きく発展させた人物として，津田永忠を概念的に把握していただけたら幸いと思いながら書き述べているのだが，なにぶんにも相手が大きいだけに，どこからどこに，どうかぶりつけば心の臓に達することができるのか甚だ心もとない。

それというのも，岡山城のある旭川河口域から，東部吉井川河口域に広がる2,000町歩の沖新田をみただけでも，われわれにとっては世紀の大事業であったろうと思われるのだが，永忠にとっては一つの事業にすぎないのだ。

岡山大学付属図書館内に池田家文庫があり，そこに所蔵されている絵図面のなかに，新田開発に関するものがかなりある。その1枚に，倉田・沖新田開墾前の海岸図がある。それには新田干拓のための汐留堤計画線が1本描かれている。後の倉田新田・沖新田を含めた範囲だが，その絵図には張り紙がしてあり，新田計画は不可能だという理由が記されている。

旭川と吉井川の間に流れる中川と砂川が，計画新田の上流域にあるのだが，小河川であるのと，名の如く砂川であり，水量が乏しいためにとても新田を養うことはで

* 社倉米——社倉法
中国の宋時代"朱熹"（朱子）が考案創設したもので，官米を元に窮民救済のために，低利の貸米制度を設けて実施したことに学び，津田永忠の建議により備前藩においても行われた。窮民の救済と藩外へ銀の流出を防ぐことが目的であったが，資金に余裕が生ずるようになり，この融資で多くの公営土木事業もなされた。

きない。ところがひとたび大雨が降れば川が荒れ，砂を流し，堤が切れて氾濫するなど，川尻に新田が成立たないばかりか，新田のために海岸に堤を築けば，水吐けが悪くなって古地まで損する。したがって新田は不可能だという内容である。

付属図書館池田家文庫の中野美智子氏の研究によれば，この絵図は延宝初年に作成されたものとしており，永忠はその問題点の及ばない範囲で，中川尻より西側に規模を縮小して倉田新田を開墾し倉安川を開削して吉井川から新田水を取入れたという経緯がある。しかも永忠の考えはそこに止まらず，沖新田を実現するために，新田を東西に区分して中央に遊水川を設ける形をとり，その部分を貞享3～4年（1686～1687）に，旭川の洪水吐けとして完成した百間川の大水尾に仕立てた。そして中川・砂川もこれに流し込む計画をたて，洪水時に堤内の水吐けをよくするために，切石造りの石樋（水門）を数多く設置することによって，排水効果をあげるという方法を工夫している。

これについて永忠は「普請奉行田坂与七郎・近藤七助両名の苦心の考案」と上役にその功を報告しているが，当然永忠の示唆もあったことが考えられるのと，和意谷墓所造営の際に，永忠が大阪から招いた石工治兵衛が，その後藩の御抱となり各所の石樋を手がけていることからみて，彼もその技術解明に一役を買っていることが考えられる。

こうして沖新田の完成後，数度の洪水時に百間川へ水が流れたが，石樋の排水状況がよくて大した被害もでなかったが，元禄15年8月には，台風による洪水に高汐が加わり，そのため300町余に海水が浸水し大被害を受けた。そこで永忠は，田坂・近藤に命じて研究を重ね，高汐対策の機能を兼ねた大規模な唐樋を，大水尾沖堤に併設した。そしてもしこれが不成功の場合は，大水尾沖堤を切り開け，東西両堤を堅固にして，砂川尻・中川尻まで入海にする腹案をもっていた。（光政公伝上巻）

だがその後宝永2年（1705）の洪水で，唐樋がすばらしい排水機能を発揮したため，第二案は実行されずに終わった。永忠はその成功を報された2年後に偉大な生涯を閉じたが，昭和43年にゲート式水門に改修されるまで，日本最大といわれた切石造りの樋門は，働き続けてきたのである。

また堤防のことについて，地元沖田村誌は次のように述べている。

> 見たところではお粗末なようで，仲々頑丈そのものである。これがこの堤防の特徴である。永年大汐・大暴風雨によく耐え，崩れそうでくずれていない。（現在は改築され昔の姿はほとんどみられなくなった）なぜ，こんなに頑丈であったのだろうか。
>
> それは堤防の位置・石の築き方・裏どめの仕方のよかったことによるといわれている。堤防の位置については，よほど慎重にやったものらしく，潮流の抵抗を考え，なるべく自然現象にそむかない所を選んだものである。堤防のまがりくねっているのもそのためである。石の築き方も極めて荒づきで，見た目は粗末至極のようである。これでよく波をかみ，やんわりと受けとめ，それで仲々丈夫なのである。堤防の裏どめには今保土という粘土をとりよせ，これで漆喰の如くしっかりと止め，この粘土のねん着力を利用したものである。昔の人の用意周到にして，如何に努力したかの一面を，うかがい知ることができる――と。

V. おわりに

佐源太（永忠のこと）少時より大節あり，深く道義に志し――（中略）――承応二年始めて烈公（藩主光政のこと）に登庸せられしより，宝永元年閑谷に隠退せしまで五十年，其間枢機に参すること亦四十年余の久しきに及び，光政・綱政に歴事して恪勤の節を致し，政治・経済・文教等に偉業を遺せしは，当時名臣多しといえども佐源太（永忠）をもって第一とす。故に備前藩の典型は佐源太の力を待たざるものは殆ど稀なりといふべし（光政公伝上巻）

光政は永忠を評して「彼者は使ひ様悪敷ば，国の禍をなすべし，才は国中に双びなし」と語ったという（吉備群書集成）

才能が優れているだけに，その馭し方をあやまると国をも滅すという。それというのも，永忠は身分的秩序より道理を重んじ，権力といえども道理に合わなければ，絶対にゆずらないものをもっていたからである。

その永忠を藩主光政は，名君といわれるだけあって，立派にきたえあげた。藩主の権力もおそれない永忠ではあったが，光政に対しては絶対に敬意を払っていた。学問の道を永忠に知らしめたのも光政であり，「それ仁人は，その義を正してその利を謀らず，その道を明らかにしてその功を計らず」という朱子学の「義利道功」を，藩政の政治理念とした光政の教えを，永忠はその生涯を通して忠実に実行したともいえる。

承応2～3年（1653～4）かんばつに次ぐ大洪水に襲われ，城下はいうに及ばず藩内は地獄絵図の状態であった。そのとき光政は「これ予が政事の不善なるに依て，天の戒め給ふなるべし，罪なき百姓の此災にかかる事悲

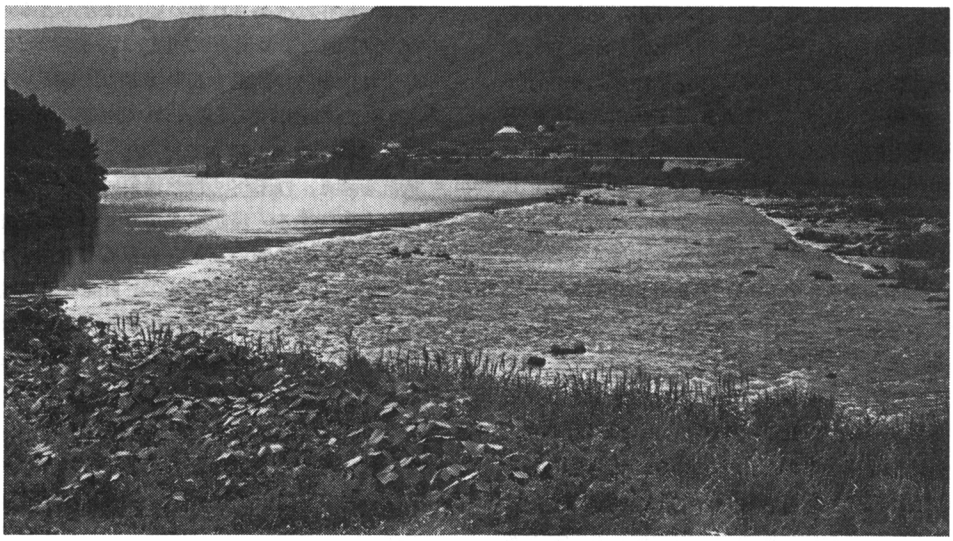

写真-1　田原井堰，津田永忠の築造と伝えられる石組の洗堰，長さ520m，幅約30m，斜構造で吉井川の中流，和気郡和気町にある。

しむに余りあり」と考え「家臣は我がものなれど，民百姓は天下の預りもの，ひとりたりとも飢人を出してはならぬ，金穀を費やし倉庫が空になっても，民の窮せざることこそ我が為なり」と，家臣を犠牲にしても百姓を救済するという方針を打出し，その思想は終生変らず，永忠もそれを引継いだために，当然老臣層や家臣団の不満が強まり，光政への不満になると共に綱政の代になれば永忠に鋒先(ほこさき)が向けられ，幾度か排斥を受けるというきびしい境遇も味わっている。だがどうしても自分がやらねばならないことは，「ごみをかぶり，一身を投げ出してもやり通さねば」と，私心を捨て大事業の数々をやりとげたのである。そうしてその役割が終わったことを感じた永忠は，宝永元年3月に組下士・知行・家屋敷を返上し，閑谷学校領のみ拝領して隠退し，肩の重荷をおろしたとき，余りにも気が安んじたためか，僅かその3年後に68歳で偉大な生涯を終えた。

永忠を語るには光政が必要であり，光政を語るためには永忠が必要である。だが私などの筆力では，とてもそれらを語り尽くすことは不可能であり，まだ大事なものを多く残している思いだが，取捨選択にあやまりがあったか，与えられた紙数も残り少なくなってしまった。

ただ私の住む和気町で，永忠の名と共に伝え守られてきた「田原井堰」について語れなかったのが残念である。

わが国に現存する頭首工――石張洗堰としては最大の内容と規模をもつものであったが，昭和60年度にゲート式の新堰が完成すれば，その雄姿は消滅する。

300年の歴史の重みと，先人の英知と技術，そして永忠の業績を私たちに語りついでくれた姿は永久になくなる。自然の理を知り，自然を生かし，自然の中に生きていく東洋思想の，技術の結集がそこにはあった。現代のわれわれが，自然の理を忘れ，力を過信することのないよう，常に教え悟してくれていたと感じるのは，私ばかりではあるまい。

〔1983. 1. 10. 受稿〕